

第23回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生【ライブ版】

2023(令和5)年8月31日 会場 円徳寺

講題 :『教行信証』 信巻 三一問答への助走 道綽「三不三信」の誨

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

どうもこんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の

ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

こんにちは。本来は先週がこの会の日程でありましたけれども、家内が浄土に帰りまして、ちょうど葬儀の日と重なってしまいまして、内内で勤めようということで、あまり知らせないで、大学関係なんかもお断りをしてと思っていたのですが、結果的に皆さん方にお知らせすることになってしまいまして、葬儀・お通夜、出席くださって、優しい言葉をかけてくださって、その上にまた過分な御香儀までいただいて大変ありがたく思っております。本当にありがとうございました。

家内は足掛け三年白血病で、一年間（2021年春～2022年春）は入院をして5回抗がん剤を打ちましたけれども、まあ、なんとか頑張って生きてくれて、まあよかったと、頑張ったということで、私は花束を持って迎えに行き、けれども、まあ体が弱っていて玄関も上がれない、頭の毛も全部抜けて、小さいおばあちゃんになって帰ってきました。まあ、しかし治ったということで、何とか体力を回復して、僕は一生懸命好きなものを作って食べさせて、やっと回復して、「これからかなあ」と思っていたら、今年（2023年）の3月、丁度十か月でしたけれども再発だということで、もう再発になると助からないということで、病院に入院して命を長らえるように「抗がん剤を打ちましょう」とお医者さんは言うてくださったのですが、家内は「治らない病気なのだから、病院に入院して抗がん剤を打つくらいなら、一日でも主人と居たい」と言うので、「私のわがままを聞いてください」と言うて、お医者さんをお願いして、入院するのをやめたのですね。

それから丁度半年、3月、4月、5月、6月、7月、8月、半年間うちで過ごしました。まあ、私は覚悟はしておりましたので、けれども考えてみると、この半年間、私はいい時間を過ごさせてもらったというふうに思っております。まあ、やっぱり命を終わっていくというのは、そんなに簡単なことではないと思います。やっぱり本人はつらくて、「なんでこんな病気になったの」と言って号泣したり、そういう中で、「親鸞聖人はこう言っとるぞ」と言って話をして、段々段々顔が明るくなっていきました。

亡くなる前の日はえらい元気で、朝「おい大丈夫か」と言ったら「もう朝なの、今日はよう寝たわ」と言って、「楽やわ、今日は」と言うから、「そうか、ちょっと待って」と言って、窓を開けて「どうや、気持ちがいいか」と言ったら、「うん気持ちがいいわ」と言って、けど、もう酸素が少ないから頭がよく回っていない。ボケてるわけじゃないんですけど、頭がちょっと回ってなくてね、「私なんの病気なの」と言ってました。「白血病やぞ」と言ったら、「ふうん」と言っていました。そして「もう治ったの」と言って、楽やったからか、あるいは、ずっと治りたいと思っていたのか、「もう治ったの」と言うから、「よう寝たら楽になるから、よう寝たらいいぞ」と言ったら、「うん、ありがとう」と言って、スイカとか桃とかちょっと食べたりして、まあ元気だったのですが、次の日がちょっとしんどそうでした。おしめを替えるのが難しくて、僕は脱がせるのは得意なのですが、はかせるのがどうも難しい。「またそんなことばかり言って」と、怒られてましたけど、負担をかけてしまうのです、へたくそだと。まあやっとな慣れてきて、亡くなる前のおしめ替えるときには、「上手になったやろ」と言ったら「うん、ありがとう」と言ってましたけど。

まあその日はすうっと寝たのですが、次の日の朝7時ごろ、僕は起きてたのですが、すうすうすうすう言ってるから、ああ大丈夫やと思ったら、そのうちに「はっ」と言い出したから「おう大丈夫か」と言って手を握ったら、もう意識がほとんどなかったですね。そして「ふっ、ふっ」と言ってちょっと息苦しうでしたけど、その内にすうーと息しなくなって、まあ楽に仏様の世界に帰ったのが、私は何よりもうれしかった。苦しんだりするのがつらかったですから、そういう意味では、なかなか「よかったなあ」と思って、今は少し、名残惜しいですけども、いつもおるのがいなとちょっとはさびしいけど、それでも「よかったなあ」という気の方が強いですね。

まあ、また浄土で山之内さん（前号の責任役員）と遇って、「あいつが来るまでに、ちょっと酒の準備でもするか」と山之内さん言っているかもしれんなあと思いますが、まあまあそんな感じでありました。看病というのは大変で体は少し疲れました。夜が寝られない。2時に起きて「大丈夫か」と言って、そつと見に行くと、すうすう息していたら、そつと寝る。4時にまた起きて、すつと息していたらまた寝るといのが癖になっていて、今も2時と4時に目が醒める。けど誰も居らんから、「あ、そうやそうや、仏さんになったんや」と思っているような状況です。

まあまあ、本人も色々悩み、「何でこんな病気になったのか」と号泣したことも2・3回ありました。「運命なのか」と言うから、「ううん、仏教では運命と言わんのだ、宿業と言うんだ」と言ったら、「宿業と運命はどう違うの」と言うから、「運命というのは、最初から、ここに決まったように人生が決められているから、だから何事もあきらめないとしょうがないと。こういう話だけでも、宿業というのは、生まれて、私たちお互いに、自由に自分で選んで生きて来たと思います。まあ私は小さい寺で、大谷大学に行きたくなかったけど、結局行ったということは、やっぱり僕は自分で選んで行った。そしてたまたまたくさんいる女子学生の中で家内と逢って、なぜか知らんけども、お互いに選んで結婚して、そしてまあ、家内が言っていたのは「立派な娘が二人出来て、立派

な婿さんが来て、孫が出来てうれしい」と、「こんなうれしいことはない」と言って、全部自分で選んできた結果を引き受けて生きていかななくてはならん。

因果の道理は、これはもう、だれが何と言っても変わりませんからね。だから、いい家庭、いい娘、いい旦那さん、いい孫が出来た。あなたと一緒にあってよかった。これも全部選んできたことです。けども、どこかでね、よく分からんけども、病気になる因も、どこかで、まあ選んだとは言わんけど、自分のものにしたんです。だから私たちにはそれが、どこでどうなったか分からんから、「何で私がこんな目に遭うの」と言うしかないけれども、私の先生は「仏様の教えに遇った時には」、ここが大事やね。「仏様の真実に遇った時には、全部自分が選んだ結果を引き受けとるんや」と。だから、「ガンもいただいたものであります。痛いことも私がいただいたものであります。」と言って全部引き受けとったやろう」と言ったら、よく知ってますから、「うん、そうやったね」と言って、「やっぱり、仏教はすごいね」と言って、「そういう意味で運命と違うの」と言うから、「そう、全部自由に自分で選んだ、その中にきつと病気になる原因もあったんやと思うよ」と。「だからそれが全部、仏様の教えに遇った時に、私の引き受けるべき業なのだ」ということを言うと、「ああ自業自得っていうことが分かったら救いになるの」と言うから、「そうそう」と。「ううん、仏教は偉いね」って言ってましたけど、やっぱり、聞くと分かるけども、自分が本当にそうっていないからね、その時は明るい顔して、2・3日は「ああそうなんや」って言って明るい顔してるけど、また十日位すると同じことを言って泣く。「何でこんなになったの」、「何でこんな病気になったの」とわーと泣く。

まあ、しょうがないですね、うん。「あなたはこういうふうには泣かない」と言うから、「うん、半分くらいしか泣かんかな」と。「なんで」と言うから、「うん、何でこんな病気になったんやろうとか、こんなのは私はたまらんとか言うのは妄想だから、妄想、自我を中心にする妄想。だから根拠がない。仏様のいのちだけが真実の根拠であって、人間が頭で考えることは全部妄想。だからそれを私は痛いほど知ってるから、そういう気持ちが起こってこんことはない、起こる。けども起こってきたときに、またこんなことが起こってきた。馬鹿な奴やなあと思って、半分ぐらい泣かんかもしれんなあ、あとの半分は泣くかもしれんなあ」と言って、まあそんな話をしてきました。

「そんなのよね、そこが、私が仏教を理解したというのと、あなたとちよつとちがうとこなものよね」とか言って、そんなことをうだうだ言いながら、「けど、泣きたくなるのよ」と言うから、「うん、泣いたらいいぞ」と言う、「ふうん、泣いてもいいの」と。「うん、泣いてもいい」。「親鸞聖人はどう言っているの」と言うから、「**「無明煩惱われらがみにみちみちて**」、自我を中心にする根性が最後まで抜けない。そこから**「欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず**」

(『一念多念文意』、東聖典545頁)とこう言っているから、臨終の一念に至るまで泣いてもいいと親鸞聖人はおっしゃっているんやで」と言ったら、「親鸞聖人は優しい人やね」って言ってましたね。まあまあ、そんなようなことをずっと話をしな、そして「まあ泣けるうちは泣け、お前元気だからだ、そのうちに泣こうと思っても泣けんようになるわ」と言ったらその通りになりました。段々弱って来てね、そしてやっぱり、ずっとそうやって仏教の話を聞いたことが、やっぱり、身で「ああそうそう」と思っていくんじゃないかなと思ひましてね、段々段々明るい顔になってね、最後頃はほんと明るい顔をして、こうやって手を合わせていることがようありました。

亡くなる2・3日前、「仏様の方が迎えに来るとするのは分かるわ。仏様はどうやって迎えに来

るんやろう」と言うから、「馬鹿お前、宮崎駿の『かぐや姫の物語』みたいに、大きな牛車で、どんちゃんどんちゃやってきつと来るぞ」と言ったら、「そんな派手に来るやろうか」とか言って笑ってましたから、なんか明るい感じになって、楽にというか、幸い苦しまないで浄土に帰りましたので、私も安心しました。皆さん方のご厚情、本当に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

それで今は、皆さん方と一緒に信の巻を拝読しています。この信の巻というのは、親鸞聖人にとっても特別な巻で、親鸞聖人の立脚地。七祖・釈尊の明らかにしてくださった「**教行証を敬信して**」（「総序」東聖典150頁）、敬って信じるというのが親鸞聖人のお立場だから、この信の巻は宗祖の自分の頂いたもののすべてをここで出していく、こういう巻として、わざわざ「別序」が付けられて、特に大切な巻として書かれています。それで最初に申し上げましたように、まず、信の巻の標挙が、「**至心信楽の願 正定聚の機**」（東聖典210頁）、こういうふうに挙げられていきます。

ですから、この『教行信証』の信の巻は別序があって、そして「大信」というご自釈があって、そしてその後212ページ（東聖典）のところから、当然のように「**至心信楽の本願の文**」というふうにあって、因願と成就文、そして『無量寿如来会』の因願と成就文、これが出てきます。これは親鸞聖人の『教行信証』を見ますと、どこの巻も大体そうなっていますから、ここは第十八願の因願と第十八願の成就文、そしてまた『無量寿如来会』の因願と成就文が出てくる。こういうことになります。そしてその後から、213ページの終わりから6行目、ここからが七祖の引用になってくるわけですね。皆さん今まで一緒に勉強してきましたように、行の巻は龍樹・天親から始まりました。ところがこの信の巻を見ると、『論註』、曇鸞の『論註』から始まるわけです。

そしてまた後で詳しく申し上げますが、この『論註』の特に讚嘆門釈、讚嘆門釈といのは分かりますね。南無阿弥陀仏という教えについて註釈をするところですが、特にここは、不淳・不一・不相続という「三不信」、それがここで説かれていきます。不淳・不一・不相続、これですね。これが説かれていきます。これはまた後で詳しく申し上げますが、念仏による機の自覚、分かりますね。お念仏をして凡夫であるということに目覚めた、その自覚が曇鸞の讚嘆門釈で初めて明らかにされていくことになります。龍樹・天親のところでは、「**憊弱怯劣**（にようにやくこれつ）」「**怯弱下劣**（こじゃくげれつ）」（『十住毘婆沙論』）というような言葉で、菩薩が菩薩道から退転して、自力では菩薩道を全うできないのだというふうに出てきます。けれども、それは念仏による自覚なのかどうかということとははっきり特定できない。讚嘆門というのは後で読んだら分かりますが、「**帰命尽十方 無碍光如来**」、こう述べるところ、そこに不淳・不一・不相続であると。私たちの心は不淳・不一・不相続と、こういうふうに出てくるわけです。

ですから、そういう意味で七祖の中で念仏による凡夫の自覚を初めて明らかにしたのは曇鸞の讚嘆門釈である。こう言い切っていいわけです。当然、親鸞聖人は「**ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし**」（『歎異抄』第二章）と、こういう教えに遇ったのですから、そしてその時に、皆さんご存知のように「**いずれに行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし**」と、こう述べたのですから、曇鸞が先だって同じように、念仏をして、そして私の身は不淳・不一・不相続である。少しも淳い心はないし、一つも一心にという心はない。そして時々仏教のことを思い出すけども、仏教のことを忘れていた時の方が多い。こんなふうに分身の身を、こういうふうに表示して、念仏によって初めて自分の身を明らかにした。それは曇鸞の讚嘆門釈であるという意味で、親鸞聖人のお念仏の立脚地は七祖に帰ると曇鸞の讚嘆門釈にあると、こういうふうにもいい

わけです。分かりますね。ですから、この信の巻は龍樹・天親ではなくて曇鸞の『論註』、ここが私の立脚地なのだと、こういうことを表明していることになります。

そして、その後にはやはり曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』が引用されます。そして大きく言うと、その後には今度は、善導大師の「至誠心・深心・回向発願心」という、『観経』の三心（さんじん）、『大経』の場合は「至心・信楽・欲生」という三心（さんしん）ですから、『大経』の場合は三心（さんしん）と濁らないで表現しますね。それに対して『観経』の方は、同じ三心なのだけでも、区別するために「さんじん」と昔から読む。『観経』は皆さんご存知のように、王舎城の悲劇をくぐって、そして韋提希が何とかこの場をうまく運びたいと言うので、主人が死なないように自分の体に蜂蜜をぬったり、瓔珞に葡萄酒を入れたりして運んで、その間に息子が心変わりをしてくれないかと思って努力したのですね。なかなか立派なお母さん、立派なお奥さんだというふうに思いますけれども、ところがそのために自力で一生懸命頑張ったことが、結果的に今度は自分が殺されていく、こういう目になっていくわけですね。

そして最後には「何でこんな子を産んだんや」と叫ぶ、そして、「提婆達多がうちの息子をそのかしたんや」と、「お釈迦様、あなたは提婆達多の従弟だろう。なんとかせー」と言って叫ぶわけですね。丸裸の凡夫になると、「何でこんな病気になったんか」とか、「何でこんな目に遭わなあかんのか」とか、どうしてもそうやって叫んでいく。そういう韋提希に対して、「よく聞きなさい」と言って説法するのが、お釈迦様の『観経』の説法ですね。そして、『観経』では自力では救われないということを教えて、本願の方に心を向き直しなさいと。「回心」。分かりますね。自分の自力を頼むというのが私たちの日常の根性です。ところがそれを突き詰めて行っても救いにはならんよと。だから何とかして阿弥陀の本願に心を向けなさいと言って、本願の方に心を向かわせていく、それが『観経』の役目でしたね。

そうすると『観経』というのは、これは、自力では救われない、これをよく知らして本願の三心に、至心・信楽・欲生という本願の三心に心を回しなさいと、これが『観経』の役目なのです。ですから、まずは「まじめにやりなさい」という至誠心。至誠心というのは、これは真実心。まじめにやりなさいと。ところが真面目にやろうとすればやろうとするほど、何が本当のことか、何が正しいか、まじめさなんて人間にあるのだろうか。清沢先生がそうですね、「何が善だやら、何が悪だやら、何が真理だやら、何が非真理だやら、何が幸福だやら、何が不幸だやら、何も知り分ける能力のない私」（『我が信念』）、自力では何も分からないのだということを通して初めて、二種深信、ここに二種深信が出てくるね。

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来（このかた）、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず」（東聖典215頁）。自力では絶対に救われないということはよく分かったと。それがそのまま「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生授受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」というふうに、「自力無効」ということを通して初めて、「かの阿弥陀仏の四十八願」に転換していく。自力から他力に転換していく。その転換させる時の「自力を尽くしなさい」と言うのが至誠心、深信。そしてここになると親鸞聖人の了解ですと、他力の回向発願心に目覚めていく。こういう至誠心・深心・回向発願心、これが『観経』の三心積の一番要になるところですね。

その三心積を信の巻は長く長く引いていきます。そうすると『論註』の三不信と『観経』の三心、これはどっちも自力では救われないということを知ることになりますね。そこを長く引いて、

そしてそれを、どう言ったらいいか、跳躍台にして見ていったら分かりますが、いいですか、この善導大師の文章は、散善義のところ、(東聖典) 214 ページの一番最後のところから(西 216、島 12-59) 散善義が引かれていきますが、215 ページの終わりのところに二種深信が出てきます。そうですね。そしてその後ずっと『観経疏』が引かれて 217 ページのところから、至誠心・深心・回向発願心というのが出てきて、皆さんよく知っている、回向発願心のところには「二河白道の比喩」がずっと長く出てくるわけですね。

そして、この三心積が終わると、今度は大雑把に言えば『往生要集』、222 ページのところに源信の『往生要集』が出てきます。そしてそれを受けて、今度は三一問答が始まっていきます。三一問答というのは、信心に大涅槃の覚りが開かれるという、それを証明するところです。ですから、そういう意味で言うと、これ見たら分かるでしょう、信の巻の一番の課題は、「なぜ他力の信心に涅槃の覚りが開かれるのか」。これは聖道門では絶対に分からないところです。聖道門では自分で修行をして覚りを開くのみだから。ところが信心に覚りが開かれるなんて、そんな馬鹿なことがあるかと言って非難するのが明恵ですからね。明恵は個人ではなくて、あれは聖道門全体を代表しているわけですから、聖道門は、浄土教以外は全部聖道門でしょう。天台宗、真言宗、それから奈良の興福寺から全部そうでしょう。そういう人たちが、信心に覚りが開かれる、そんな馬鹿なことがあるかと、それが不思議でしょうがないわけです。だから「他力の信心なのだ」ということを、自力ではない、「自力無効」ということを知らして、本願の三心に目覚めていく他力の信心なのだということをここまで証明して、そして、他力の信心になぜ涅槃の覚りが開かれるのか、これを証明する三一問答に入っていくわけです。そしてこの三一問答のところまで前半が終了します。「至心信樂の願」、この意味が、この三一問答のところまでで完成する。

そして他力の信心を得て大きな涅槃の覚りの中にあると目覚めた者は、今度は信の巻の後半になります。それは「真の仏弟子」になる。それが「正定聚の機」やね。機というのは人間だからね。だから本当に他力の信心を頂いて、仏様の覚りの中にあるということを知った人は真の仏弟子になっていくのだというのが信の巻の後半になっていきます。それは今から申し上げますが、この三一問答がずっと長いですよ。ずっとあってね、そして三一問答の 232 ページのところ、ここに至心・信樂・欲生の最後が説かれていきます(西 241、島 12-75)。そしてその後、この三一問答を受けて、善導大師が「能生清浄願往生心」(東聖典 220 頁) というのは、実はこの他力の信心のことですよと言うので、235 ページのところには、「能生清浄願往生心」だったのですが、往生を取って「能生清浄願心」と、こういうふうには本願による心こそ、願生心、往生心なのだ、こういうふうにして、それこそ金剛の如し、壊れないダイヤモンドのような心なんて人間にはないけれども、他力による他力の信心こそダイヤモンドのような心なのだというふうにして、そして 236 ページ、ここで菩提心というのは、明恵が言う菩提心は自力の菩提心だけれども、法然は菩提心を「いらない」と言ったのではないと。他力の信心こそ本当の「王の菩提心」と、こう言ったのだと言って、ここで菩提心積を展開して、そのあと 239 ページ、信の一念積、これは明恵と戦いになった時の重要な文章ですが、ここに信の一念積があつて、そして、その後、ずっと他力の信心について説いていって、243 ページの最初のところから、「横超断四流」というところ(西 254、島 12-85)、ここから後半になります。信の巻の後半ね。

ですから前半は三一問答が中心になっている。そしてこの後半をよく見ますと、次のページをめくっていただくと、245 ページのところに、要するに他力の信心によって、仏様の覚りに眼を開

いた人は真の仏弟子になると、こう言うので245ページに「真の仏弟子」、「金剛心の行人」、そして「必可超証大涅槃」と、こういうことが真の仏弟子の証拠だと、こう言われて真の仏弟子釈がずっと続いて、250ページのところに真の仏弟子のまとめの文章が来るわけです。

私をお育てくださった松原先生がお亡くなりになる時に、さっき言ったようにガンで、そして骨と皮だけになって、最後に手を合わせて「延塚君、親鸞聖人の教えで一番大切なところはね」と、こう言って、遺言のごとく、ここを言われました。「**弥勒大士、等覚金剛心を窮(きわ)むるがゆえに、龍華三会の暁、当に無上覚位を極むべし**」。弥勒大士は、自力で金剛心を窮めた菩薩です。けれども、これは五十六億七千万年経って、衆生を教化してやっと仏になっていくのだと。そのあとに言われました。「**念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す**」

(西264、島12-92)る。「念仏者は五十六億七千万年経なくても命終わった時に必ず仏様の世界に帰って行くのだ」と、「これが親鸞聖人の教えの大切なところですよ」と、こう言ったのはこの文章でしたね。ですから真の仏弟子の結釈を先生が遺言のごとくおっしゃったというのは、「私は真の仏弟子として生きて来たのだ」ということを告げたかったのだというふうに思います。

こんなふうに、その後は、真の仏弟子というのは、本当は聖道門では弥勒のように七地沈空を超えた菩薩のことなのです。ところが真宗の真の仏弟子というのは菩薩じゃなくて、むしろ凡夫になった。自力では救われないという凡夫になった。それが大事なのだということで、その真の仏弟子の後に、わざわざ皆さんが知っているように悲嘆述懐、「**悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず**」、浄土に生まれて帰って行くことを楽しまず(東聖典251、西266、島12-93)と。わざわざこういう悲嘆述懐を置いて、いわゆる、これまで伝わってきた菩薩道の七地沈空を超えた菩薩とは違うのだと、凡夫なのだということを行うために、この悲嘆述懐の後は皆さんご存知のように、ずうっと阿闍世の長い長い文章(東聖典251~271)が引かれます。阿闍世は分かりますね。父親を殺して、助からない、苦しんだ、そういう者が実は、「真宗の真の仏弟子として本願に救われていくのだ」ということを証明するために長く『涅槃経』を引用する。そしてその後は皆さんご存知のように、「**唯徐五逆誹謗正法**」

(東聖典272)という、唯徐の文を問題にしたのは曇鸞と善導ですから、その曇鸞と善導の文章を長く引いて信の巻が終わっていきます。

そうすると今言ったように前半は自力無効ということを通して本願の三心に目覚めていく、その本願の三心に目覚めていった他力の信心に初めて涅槃の覚りが開かれるのだ。これを証明しているのが前半です。後半は涅槃の覚りが開かれた者は真の仏弟子になるのだと。けども聖道門のように七地沈空を超えて菩薩になるのではなくて、凡夫に帰って「**わが(よき)親友(しんぬ)ぞと教主世尊はほめたまう**」(『正像末和讃』東聖典505)。釈尊の方から「私の友達だ」と言ってくださるのだと。自分で、おれが真の仏弟子だと名乗る資格はない、凡夫だから。「私は凡夫です」と頭を下げる。ところがその時にお釈迦様の方が「我が善き親友なり」というふうに言って下さる。「東方偈」に出ていましたね(東聖典51)。「我が善き親友」だ。あれが真宗の真の仏弟子なのであって、菩薩になるのではないという意味で『涅槃経』、「唯徐五逆誹謗正法」、それを引いて信の巻が終わっていく。

そうすると、今は私たちが皆さんと一緒に読もうとしているのは前半ですから、前半だと一番の山はここになります、三一問答です。そうすると曇鸞の三不信と善導の三心釈、これは三一問答の助走になるわけです。三一問答を導いていく時の私たちの立脚地。助走に、三一問答に入っていく

ためにどうしても言っておかなくてはならないこと、私たちが覚りを悟って、涅槃を覚るのではなくて、むしろ自力無効ということを通してでしょうと。曇鸞もそうでしょう、善導もそうでしょうと。この三不信、そして、至誠心・深心・回向発願心という自力の三心（さんじん）、これを通して初めて他力の三心（さんしん）に目覚めていくのだという意味で どうしても三不心と三心積が三一問答に行くまでの助走にしなければならない。そこに真宗の特徴があるのです。

だから、信の巻の前半の中心は三一問答ですが、曇鸞の三不信と善導の三心積、これが三一問答を開いてくるときの私たちの身の問題、身の立脚地、そこになって、初めて他力の信心に目覚めていくのだと、こういう助走になっているわけです。そういう意味で曇鸞の三不信、それから善導の三心積があるのだということをよく知ったうえで読むと、「ああなるほどそうか」というふうに読めていきます。分かりますね。全体の構造、全体がどうなっているか、ということを見るとそうなっているでしょう。だからそういうつもりでここは読んでいかなければいけない。こういうことになるわけです。

いいですかね。「三、三、三」と言っているから、三をみんな集めたのよ。この三不信、三心、これみんな三だから、三をみんな集めたのだけでも、親鸞聖人はこう言う形で、三一問答に入るための助走を述べておられる。しかしこれは、いいですか、親鸞が考え付いたのではありません。そうじゃなくて、実はこれを詳しくしゃべり出すとまた時間がかかるけど、曇鸞の三不信に、三信を足して「三不三信」の誨（おしえ）を説いたのは道綽ですね。分かりますね。そして「正信偈」の中に「三不三信の誨（おしえ）、慇懃（おんごん）にして」（東聖典206）と出てきますね。ところが『教行信証』には一か所も三不三信の誨（おしえ）は出てこない。だから一体、「三不三信の誨、慇懃に」、つまり「慇懃」というのは、「丁寧に、そして私たちの凡夫でも分かるように、丁寧に道綽が教えてくださった」と感謝しているにも関わらず、一か所もその誨は出てこない。『教行信証』だけではありません。和文にも出てきません。

だから普通の解説書はよく分からないから、三不三信の誨についてはほとんど触れている人はいない。書いてないから分からない。唯一か所あります。これも分からないのですね。先に申し上げておきましょうね。402ページの『浄土文類聚鈔』（西477、島13-1）。これは『教行信証』のダイジェスト版です。この底本になっている、もともと私たちのこのお東の『真宗聖典』（『定本親鸞聖人全集』）の底本になっている（光延寺本の）『浄土文類聚鈔』には、実は「三不三信の誨慇懃」と、この表紙の裏に、聖典にはないよ、註にあるかもしれない、後で見といて。ちょっと待ってね、見てみましょう。ああこれには出てないね。この底本というの分かりますね。この聖典に載っている、もともとの基になったもの。原本ね。原本を見ると本文ではありません、本文ではなくて表紙の裏側に、今申し上げましたように、「三不三信ノ誨慇懃」、こう書かれてね、「三不トハ雑ノ義也」。三不とは雑心、自力の意味である。「三信トハ専修也」。そして、「不心実 不淳 不決定也」。表紙の裏側に親鸞聖人の字でこういう書き込みがあるのです。

ですから表紙の裏側だから、一体どういう意味なのか分かりにくいけども、ともかくここに三不三信の誨が一か所だけ出てくる。これは親鸞聖人の直筆ですから、もしかしてうがった考えをする学者は、裏にメモしていたものをそのまま使ったから、裏にそういうのが載っているのもともと『文類聚鈔』とは関係ないと、こういうふうに言う人もおられます。なぜか分かりませんが、ともかく、こういうふうに裏にきちっと三不三信の誨が出ているのはここだけなのです。そして前にも言ったように、いいですか、この『文類聚鈔』というの教・行・信・証というのが終わって、そ

して、「文類偈」（「念仏正信偈」）、いわゆる「正信偈」に当たる「文類偈」があつて、その「文類偈」が終わると今度はいきなり何の説明もなく、414ページのところから三一問答が始まります。そしてそれが終わると今度は419ページのところから、いきなり何の説明もなく三経一異の問答が始まります。つまり親鸞の己証、親鸞の立脚地、三一問答（信の巻）、三経一異の問答（化身土の巻）、こういうふうになってるわけですね。

そうすると、よく見ると三不三信の誨から、一つは三一問答が開かれる。三不三信の誨から、もう一つは三経一異の問答が開かれる。こういうことを親鸞は、この『文類聚鈔』の表紙裏に、これを書くことによって示唆しているのだというふうと考えられます。つまり先程言った曇鸞の三不信と善導の三心釈は、これは確かに三一問答の助走になっているけど、親鸞が勝手にそうしたのじゃなくて、実は、三不三信の誨にすでにそれが教えられているでしょうと言って、七祖に学んでいるわけです、親鸞は。分かりますね。親鸞の『教行信証』は全部そうですよ。自分で勝手なことを言っているところの一つもない。全部七祖の言ったことを受けて、そして自分の見解を述べているわけですから、三一問答と三経一異の問答というのは、これは確かに親鸞自身の見解なのです。しかしその見解は実は、三不三信の誨によって、私はこの見解を述べているのですよということ言っていることになります。ここが大事です。ですから、なぜ大事かというのは後で申し上げます。ちょっと時間が来ちゃったので、今日はまじめに休みましょう。

10分休憩してその後に三不三信、ちょっと難しいけど、親鸞は勝手に自分の見解を述べているのでないんだと、全部七祖に教えられている。先輩にね。そして、その先輩に教えられたことを自分の足でもう二、三步進んで親鸞の見解を述べている。二、三步帰れば全部七祖が居る。こういう形になっているということをよく知っておいていただきたいんですね。勝手なことを述べておるんじゃないんだということです。ちょっと休憩しましょう。南無阿弥陀仏（休憩）

講義 2

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

それではもうしばらくお話をします。すみません。難しいことばかり言って申し訳ない。聞きなれない人は「あいつは何をぐじゃぐじゃ言っているのだ」と、「早く三一問答を読めよ」と、こう思っている人もおるかもしれんけど、なぜ三一問答が開かれたのか、どこから開かれたのか、そういう理由を書いている本は一冊もありません。それが、実は親鸞の思想をよく了解する時の大切なことです。だって理由が分からなかったら何のことか分からないでしょう。つまり本屋で本を買う時も、あとがきの方を読んで、ああこの人はこういうつもりで書いたんやなあと読んで買うでしょう。まあよく当たる時もあるし、当たらないときもありますね。そうやって買うでしょう。だから作者がどんなつもりで書いているのかということが分からないと、その本は読めないことになる。

それで僕は全部理由を探るという勉強をしてきました。本来理由を探るはいけないというのが真宗学の慣習です。宗祖が決めたのだから、宗祖の決めたことは、末学はありがたくいただきなさいと。そんなことでは学問にならない。今の学問はね。だから、宗祖がなぜこういう三一問答とい

う大切な問答を開く時に、一体何が根拠になって開かれているのか、それが分からないと本当に分かったことにならないから、だからごじゃごじゃ申し上げて大変恐縮です。だけどそういうことが分かってくると、今度は違った喜びがあるのよ。「そうだ」という、「もうまちがない」という。だから私は大学院の学生によく冗談で言ってましたけど、一回親鸞聖人のところに電話してみなさい。「京都 075 親鸞親鸞」とかけてみなさい。「そうだ」と言うから、その「そうだ」と言われるまでこっちが勉強する。そして、これは僕の意見じゃなくて「親鸞がこう言っている」ことをよく考えてみると、こういうことだということを言っているわけで、私の意見ではありません。

親鸞もそうです。よく考えると、七祖が全部言っていることを背景にしながら一歩二歩ぐらい進めている。そういうやり方で親鸞聖人が『教行信証』を書いているということが実に素晴らしい。自分勝手な見解を書くというのは、これはまあ、いろんな方がやることだけれども、親鸞は自分の思想を表現するときに、七祖を背景にすること。そして前にはお釈迦様の『大経』があること。そういうふうにして『教行信証』が書かれているために、『教行信証』はやっぱり経典と一緒にです。親鸞の恣意、私的な関心はどこにもない。だから『大経』は末法になっても百年残るとお釈迦様が言うのだったら、『教行信証』も末法になっても百年残ると思う。それは親鸞の私的関心がどこにもないからです。そういう素晴らしい本だということを知っておいていただきたい。そのためにくたくたくだ言っています。眠たい人は寝とっていい。「なんか、三が三つじゃとか、なんか言うとしたなあ」と、このくたくだの説明がとても大事なことだと思います。

それでね、誠に申し訳ないけど、いつか垣本さんが聞いてくださった時に、少しお話をしたわけですが、道綽の三不三信というのは、曇鸞の「不淳・不一・不相続」、わが身は不淳であり、不一であり、不相続である。これは自分が自分のことを反省したというのではなくて、はっきり仏様の「世尊我一心」と言う他力の信心、一心に立って自分の身を不淳、不一、不相続だと、こういうふうに着目したわけですね。これが曇鸞の三不信なのです。

ところが道綽は、道綽になると、これに反対に「淳心・一心・相続心」と、これを付け足しただけなのです。だから何のことかよく分からないけれども、とにかくこれを付け足して、そしてこう書いています。「若しこの三心を具して生まれずば、第十八の願は虚偽となる」(「この三心を具しても生ぜずといはば、この処(ことわり)あることなからん。」「安楽集」巻上、西・浄土真宗聖典・七祖篇232)。これは道綽の言葉です。曇鸞の不淳・不一・不相続に、淳心・一心・相続心と付け足して、三不三信と。こう付け足すのですね。そして道綽は「若しこの三心を具して」、「三心を具して」というのは、勉強している人はすぐ分かるでしょう。『観経』の三心積の最初にある。「至誠心・深心・回向発願心、この三心を具して必ず往生をする」と、こうある。だからこの言葉は『観経』の112ページを開けてみてください。ここに定善が終わって散善が説かれます。そこをちょっと読んでみますよ。

「仏、阿難および韋提希に告げたまわく、「上品上生」というは」と、こうありますが、これは上品上生から下品下生まで包むと、こういうふうに言われています。「上品上生」というは、ここからね、「もし衆生ありて、かの国に生まれんと願ずれば、三種の心を発してすなわち往生す。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心なり。三心を具すれば、必ずかの国に生ず。」(西108、島2-21)

ここにある「三心を具すれば」、これが道綽の言う「三心を具して」というのは、この言葉をそのまま持ってきているから、これは『観経』の散善のところ、それを意味している。そしてこれは

分かるでしょう、「若不生者」。「もし生まれずば」、若不生者。この言葉は、若不生者ですから、『大経』の十八願。そうですね。そうすると道綽は不淳・不一・不相続に、淳心・一心・相続心を引っ付けて三不三信と言っているのは、『観経』の三心釈というのは、至誠心・深心・回向発願心、自力ですから、不淳・不一・不相続と一緒にやね。そうすると、ここに、不淳・不一・不相続のところに、至誠心・深心・回向発願心を見ているということになります。不淳・不一・不相続と、至誠心・深心・回向発願心とは、これはどっちとも自力の心ですから、ですから『観経』の三心釈と十八願をここに置いているということは、『観経』の三心、至誠心・深心・回向発願心はどう言っても自力だからこっち側に属する。それに対して、「もし生まれずば」というのは『大経』の十八願ですから、至心・信樂・欲生ですね。そうすると、道綽は淳心・一心・相続心と、こう言ってるけれども、これは『大経』の至心・信樂・欲生と、「こういう事をちゃんと見ながら、私は三不三信を明らかにしたのですよ」と、こういうことになるね。そうすると道綽はただ淳心・一心・相続心を引っ付けただけやないかと、簡単なことやないかと、こう思うのだけでも、道綽のこの意図をよく察すると、実は不淳・不一・不相続というのは自力を表す。自力の自覚を表す。だから不淳・不一・不相続と至誠心・深心・回向発願心とは『観経』の自力を表すということだと。

それに対して、「私はたまたまこの反対の心、淳心・一心・相続心と反対のことをここに述べたけども、これは実は『大経』の至心・信樂・欲生ということをお託しているのですよ」と。こういうことになります。そうですね。言ってること分かりますね。そうなるでしょう。こちら側（不淳・・）は『観経』の自力、こちら側（淳心・・）は『大経』の他力、これを表していることになります。こういうことになるね。そうすると、さっき申し上げたように、他力の至心・信樂・欲生ということに目覚めるためには、自力を尽くさなければならぬから、そして逆に言えば至心・信樂・欲生に目覚めてみれば、ますます私は自力でしか生きていけないということがはっきりしましたと、こういう事にもなるね。

そうするとこの一心という他力の信心の中身は、一方で如来の本願の世界に立っている、片足は。もう一方は、私自身は凡夫であるという自覚に立っている。実に『大経』と『観経』を背景にしながら、この三不三信の誨は実に見事な教えを説いているわけです。分かりますね。よく見たら分かるでしょう。だから、この他力の至心・信樂・欲生を明らかにする三一問答の助走に不淳・不一・不相続の曇鸞と、善導の至誠心・深心・回向発願心の三心をちゃんと据えている。信の巻にね。それは当然や。自力を尽くして、自力無効ということを通して初めて他力に目覚めるのですよと。だから、三一問答の助走はこれ（三不）とこれ（三信）を絶対に置かなければならない。それはちゃんと道綽が言ってるでしょうということになります。分かるね、言ってること。僕が言っているのじゃないよ。親鸞がそう言ってるのだからね。だから親鸞は勝手なことを言っていないというのは、そういう意味です。

そして、いいですか、他力の一心と、これ（不淳・・）、衆生の信心やね。他力の一心は、私たちに起こってきた「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」という、この一心の自覚は、一方で凡夫の自覚、一方で仏様の涅槃の覚りを開いていく、この二本足で立っているのだと。こういうことですね。こっち（淳心・・）に注目すると、一心と至心・信樂・欲生との関係。これが三一問答です。そうやね。他力の一心は至心・信樂・欲生と一緒にすよということを証明するのが三一問答ですね。だから三一問答はこの一心と道綽が言う至心・信樂・欲生と、この関係を明確に示していることになります。そうすると三一問答も、これは道綽の三不三信から開かれてきているということが分か

りますね。

そしてもう一つは、この自力を尽くして他力に目覚めていく、あるいは、他力に立って自分は自力だということが分かる。だから自力無効ということがなければ『大経』の本願に目覚めることがありませんよ。『観経』は、だから自力無効ということを教える必要な門、「要門」です。『大経』は、これは救いを実現する「弘願」です。要門と弘願。これに『阿弥陀経』の「真門」を足せば三経一異の問答になります。そうですね。そうすると三一問答も、三経一異の問答も、これは『阿弥陀経』の問題は、またちょっと後で、というか、これは親鸞独自に学んでいくことになりますけれども、これに『阿弥陀経』を足せば、要門、弘願、真門と、こういうふうに三経一異の問答もここから開かれていくことになります。だから、『文類聚鈔』の表紙の裏側にこう書いている。「三不三信ノ誨慇懃」、ちょっと違うところから見ましょう。

今の教えを頭に入れながら、みなさん七祖を考えると、一番有名なのはやはり曇鸞、善導ではないですか。曇鸞と善導は『教行信証』にもたくさん引文されていますからね。ところが道綽の引文に三不三信の誨がない。なぜか、これを先に言いましょう。それは親鸞の立っている立脚地だから。自分が立っているところを文章にして言わなかった。よく読みなさい、分かるでしょうと。私がどこに立っているか。私は道綽のおっしゃった三不三信、これが私の他力の信心の内容なのです。片一方は愚禿、片一方は如来の世界、これが私の立脚地ですと言うので、道綽の三不三信に親鸞は立脚しているために、自分の立脚地については自分の言葉で表明しなかった。読めば分かるはずですよ、私が立っているのは三不三信だからと、こうおっしゃっているのであって、そのために三不三信の誨はどこにもない。

だから、ふと思うと、道綽は何のために居たのだろうか、分かりにくい。そうですね。それからもう一つ分かりにくいのが源信。龍樹、天親、これは有名な菩薩だから大事だろうと。それから曇鸞、これは註釈した人で、曇鸞の『論註』をいっぱい引用しているからこれは大事だと分かる。しかし道綽になるとどうもよく分からないと、こうなるのです。そして善導大師、これは大切や、法然が引いたのだからと、法然の師匠だからと。そうすると源信が谷間になる。だから七祖で一番分かりにくいのが道綽と源信だということになります。そうですね。

ところが面白いことに、いいですか、法然の書いた全集をずっと読むと、法然が褒めちぎっているのは道綽です。法然が「あの人は偉い、三不三信なんて天才だ」と。「あの三不三信の誨が道綽を輝かしているのが分らんかね」と言って、親鸞に何度も講義をしています。そして、もうちょっと言うと、「三不トハ雑ノ義也」。つまり、三不とは、雑心というのは自力が混じっているということだから、三不というのは自力だと、こう言っています。そして三信、こっち側（淳心、一心、…）は自力が混ざってないから、これは専修念仏ということだと。分かりますね、言っていることは。こっち側（三不）を雑修と受け止めたのが善導大師。こちら側（三信）を専修と受け止めたのが善導大師。だから源信の書いた『往生要集』を読みなさいと。源信は偉い人だと。源信は道綽と善導大師の師資相承を見破っている。道綽のこっち側（三不）を雑心、自力だと受け止め、こっち側（三信）を専修念仏と受け止めたのだと。だから善導は、この三不三信を背景にして念仏一つと言うので、専修念仏に立って、南無阿弥陀仏を中心にして六字積を建てた。

それは、こちら側（三信）を専修念仏と受け止めたからだ。それを見破っているのは源信の『往生要集』だから、『往生要集』を読みなさいと法然が言うのですよ。もし興味があったら『往生要集』を帰って読んでごらん。『往生要集』の一番最後のところに出てくるから。善導大師は、道綽

のこの不淳・不一・不相続ということ「雑」として受け止め、そして淳心・一心・相続心を専修の念仏として受け止めたのだと、こう言うわけです。だからこの文章は親鸞の文章ではなくて、これは法然の教えです。「三不トハ雑ノ義也、三信トハ専修也」。そうすると、法然とは偉いでしょう。つまり龍樹・天親、これは菩薩だからすぐ分かる。そして曇鸞は、これは天親の『論』を註釈したのだから、そして『論註』を見ると、龍樹と天親をちゃんと並べて『論註』は引いているのだから、龍樹、天親、曇鸞まではすぐ分かる。そして曇鸞の三不信を、今度は三信と並べたのは道綽ですから、法然は「道綽は偉い、あれは天才だ」と。しかし道綽と善導の師資相承を見抜いているのは源信だから、だから一番偉いのは道綽よと、浄土教の中で道綽よと。しかしそれを見抜いているのは源信だから、源信も偉いのよというふうに、しつこく言うわけです。

そうすると、道綽、善導、源信、源空と七祖が決まるでしょう。そういうふうに、七祖もこの道綽の三不三信の誨をもとにして、法然が教えていく中に七祖が決まっていくわけです。だから私たちの感覚は勉強が足りないから、つまり道綽の三不三信の誨がいかに大切かということが分かっていないから、これはどれだけ大切か分かるでしょう。今ちょっと説明しただけやけど。一心と至心・信楽・欲生の関係が三一問答。『観経』、『大経』、要門、弘願。それに『阿弥陀経』を足すと三経一異の問答もここから出てくる。そうすると親鸞の独特の『教行信証』の山である三一問答と三経一異の問答は、この道綽の三不三信のところにある。それがこれまでよく分かっていないために道綽がよく分からない。何のことを言っているのか。しかも道綽の三不三信の誨は、親鸞の立脚地であるために、親鸞がどこにも引用しないから、こういうことを表立って勉強してこなかった。そのために道綽と源信が谷間になって分からなくなっている。

逆なのだと法然は言います。法然はものすごく勉強していますからね。あの『法然全集』を読んでごらん。あの人は偉い人や。ほんと涙が出るぐらい偉い。親鸞も偉いけど、法然は偉い人ですよ。その法然が今言っているように、浄土教で一番偉いのは曇鸞だけでも、まあ道綽が偉いと。そして源信が道綽と善導の師資相承を見抜いているのだと。道綽、善導、源信、源空、ここまで決まっています。そんなふうに七祖も決まっていく。ということは、この道綽の三不三信の誨がどれだけ大切かということ。これが、よく腹に入れておかなければならないことになります。それを腹に入れて『教行信証』を読むとよく分かる。だって、三不三信の助走は不淳・不一・不相続から始まって、善導の至誠心・深心・回向発願心の三心積になって、そして三不三信の誨に展開していくでしょう。これも道綽の教えによっている。こういうことになりますね。

いやあ偉いでしょう親鸞は。勝手なことを言っていないのですよ。よく勉強するとそうなっていますから、僕は自分の勝手な見解を言っているわけではありません。そうなっているでしょう。それが見抜けただけ。そこが大事なところです。いいですかね、そういうことを背景にすると、なるほど信の巻の一番最初は龍樹・天親じゃなくて曇鸞からやと。そしての不淳・不一・不相続、善導大師の至誠心・深心・回向発願心、それをふまえて他力の至心・信楽・欲生ということが起こってくる。そんなふうな展開になっているというふうに見ると、信の巻の展開もよく分かるでしょう。助走になっている、助走に。まあそういうことになっているのよ。

もうちょっと言おうか。いい、これはね、皆さんは初めて聞いたから「ああ、そうや」と思って、半分ぐらいは「おお、そうか」と思ってるけど、半分ぐらいは「ふうん」と思ってるかもしれんけど、もうちょっと言おうか、いいか。道綽の三不三信というのは、どこまでいっても、これは信心です。信心です。ところが善導大師になると、これ(至誠心・・)を「雑修」とし、こっち(至心・・)

を専修念仏と言うと、これは信心じゃなくて行になる。そうですね。だから道綽はどこまでも信心を明らかにしているのに、善導大師のところで信心を行に転換している。『観経』によって転換している。そして、それは法然にとってはすごいこと。信心なんていうのは、大切ですよ、大切だけど理論的になるから、そうじゃなくて、その本当の信心は、ただ念仏一つでいいのだと、実践は念仏なのだ。こういうふうに、実践というところから見ると善導大師は偉いというふうに法然は褒めるわけです。

ところが、どうも明恵はこれを知っていたきらいがあるのです。「法然、お前達は念仏が大事だ念仏が大事だと言ってるけど、そもそもこれは他力の信心を念仏に置き換えとるやないか、善導大師のところで」と。だから『大経』で「あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん」（第十八願成就文 東聖典44）。この「乃至一念」を法然は念仏と読むと。念仏と読むけども、もし信心歡喜がなかったら、念仏は空念仏になるから、だから第十八願の大事なものは信心なのですよと。もともと道綽もそれを言っているのに、これを行に変えたから、念仏だというふうに善導が変えるから、だからお前はそれを引き継いで念仏やと言っているかもしれないけど、善導のところでひっくりかえとるやないかと、おかしいやないかということを見抜いているのかもしれない、明恵は。そこまで言ってないけど、ひょっとして彼は、それを知っていたのではないかなと僕は思う。あの人は偉い。また明恵というのによく勉強している人だから。

分かるでしょう。ここ（道綽）までは信心なのです。善導大師になっていきなり今度は行に変わっていくわけよ。けども、行に変わってるけども、これが専修念仏に変わったのだということを見抜いたのは源信だから、「源信偉い」と言って法然が源信をさかん褒めます。「この人は偉い人だ偉い人だ」と言うのですね。まあ日本に天才は二人おりますよ。法然の前は源信です。あの人が偉かったんだ。それから法然やね。その次はやっぱり親鸞ですよ。まあまあそういう意味で、これはよく知っておかなければならない。そして、よく勉強しているのですよ、昔の人達は。明恵はこれを知っていて、「お前、善導大師のところで、信を行にひっくりかえしているやないか」と。「だからお前が念仏だ、念仏だと言うのはおかしい、もともと信心じゃないか」と。「だから『大経』は信心歡喜が大事なんだ」と。こういうふうに言っているように思われるのです。明恵は立派です。ある意味で言えばね。

いずれにしても、道綽の三不三信の誨は真宗の要になっている。浄土真宗の一番の要になっている。親鸞の立脚地になっている。ここから親鸞の己証が展開し、ここから七祖が展開している。そのように道綽の三不三信の誨は、一番の親鸞の立脚地になっている。それを教えたのが法然です。だからこれは法然の言葉なのです。『法然全集』を読んだらこの通りに出てきますから。だから、これは法然の教えを書き付けていることになります。しかしこれが浄土真宗という仏教の立脚地になっている。それをよく知っておいてください。そうして読むとよく分かる、『教行信証』が。いいですかね。ちょっと難しかった？。僕がまじめになるとみんな寝るからね（笑）。けど言ってることは本当のことだから、そのうちに段々分かってくる、勉強していくうちに。「あああ、そういうことか」と、いうことが分かってくるから。僕は勝手な意見を言っているのではない。「こうなっているでしょう」ということを言っているだけで。親鸞は偉いでしょう。

そういう意味で今日は三一問答の助走を手掛かりにして、親鸞がどこに立って『教行信証』を書いているか、親鸞の立脚地、それは、実は「三不三信の誨（おしえ）慇懃にして」（東聖典206）と「正信偈」に書いてある。丁寧に教えてくれている、『観経』と『大経』の関係を。一心と至心・

信楽・欲生との関係も丁寧に教えてくれている。要門と弘願も教えてくれている。こんなふうに、「全部、道綽が丁寧に教えてくれているでしょう」と書いているのはそういう意味です。今私が申し上げたような意味です。だから真宗の立脚地・真宗の核心はこの道綽の三不三信にあると、こういうふうに考えてください。『教行信証』はそこに立って書かれていると思われま。

それでいいですかね、今日は。大体申し上げたことですが、初めてお聞きする人は「なんかややこしいことをあいつは言っているなあ」と思うでしょう。まあまあ、本当は何遍も何遍も言うといのですが、これね、法然は何遍も何遍も言ってます。そうすると、親鸞はそっちで聞いていたわけやから、もう耳にタコができるほど聞いているわけよ。僕は松原先生の本願成就文と一緒に。もう耳にタコができるほど聞いているから七祖はすぐ決まる。ここからすぐ決まる。三経一異の問答、三一問答もすぐにここから展開する。こんなふうに親鸞は若い時に法然門下で『教行信証』の核心を叩き込まれた、法然に。絶対そうです。そうに決まっている。それはそう、仏教というものはそういうものや。最初に出遇った先生のところで完成している。

それをどんなふうに、きちっと展開して理論づけていくか。それが今度は私の責任になる。自分の責任になる。しかし出遇ったところで完成している。法然に出遇った時にもう完成しているんだ。他力の信心に立って、「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（『歎異抄』第二章）。こう言って、そのまんまで本願の中にあるのだと、こういうでしょう。だから完成している。それを『大経』に立って再構築していったのが『教行信証』ということになりますね。まあ、今日はここまでにしときましようか。

ああ、「今日はお父さんどんなお話してきたの」と聞くのです、帰ったら（笑）。今日は聞く人がおらんわあ。「今日はな、こんなので難しいことを言って来たんじゃ」と言ったら、「うーん、難しいね」って言って、しばらく僕の酒の相手をしてくれた。今日から帰るとフータの猫しかおらん。猫は「にゃん」とも言わないから、けどあれは仏さんみたいや。家内が亡くなったのを知つとる。まあよく分かつとる。だから、最近ちょっとあいつふさいでいる。ほんとふさいでいます。変な話やけど、息を引き取った時には、うちの家内は不思議と、僕はおしめを替えてやって、おしめを替えていくと、ここの肉が段々落ちていくのです。そして皮だけになってきた。それでこれはもう危ないと思っていたけど、なんでかしらないけど顔はやせなかった。ほんとに顔だけはやせないままやったんや。それでそのまま亡くなったから、息引き取ったすぐの時には、まだ「おい」と呼んだら「うん」って返事しそうな、まだおるのよ、そこに。娘が帰って来て、ちょうど亡くなったのが朝の7時ですけど、娘が着いたのが3時でしたね。そうしたら、その時は「お母さん」と言って、こうやって見たら、「うわー」言うてお母さんに抱き着いて、「お母さん、お母さん」と言ったときに、まだそこにお母さんおったのよ。

一日置いとったのよ。そしておらんようになった。やっぱり何というか、ちゃんと死体になったのかな、あれ。そうなったときにフータを、猫やから、何度も見せたのよ。「バイバイしときや」と言って。お母さんがおるときには、こうして見とったけど、おらんようになったら「にゃん」と怒っていたね。不思議や、あれは分かつとる。

そして、僕が車椅子を押してトイレに連れて行くでしょう。そしたら、ちよろちよろちよろちよろトイレの周りをぐるぐるぐるぐるするのです。だから最初怒っていたのです。「どけ、お前うるさいな」と言って、「足を引くぞ、馬鹿たれが」と言ってたけど、よく考えたらね、僕が一人でトイレに行っても絶対起きてこない。こうして寝て薄目開けて、「ああ、あいつか」みたいな（笑）。奥

さんが車椅子に乗ると必ず出てきてぐるぐるするということは、これは心配しとんのやな。そしてもし俺が出来るのなら車椅子を押してやりたいのだけどみたいに心配しているから、それが分かってから「フーちゃんごめんな」言って怒って、「心配してくれてありがとうな。ちょっとよけとけよ」と言って、「危ないぞ」と言って優しくしてやると、フータは「よし、分かってくれたか」みたいな顔をしていた。だから、あれ、猫でも分かっている。そして亡くなったのを知っているから、昨日も今日もふさいでいる。なんか知らんけど、こうして。だから今日帰って、まあ、あいつを励ましてやらんとあかんけど。

まあまあ、要するに、命が「感応道交」しているんや。人間は理性だけで分かり合えると思ってるけど、そうでなくて、もっと根源的なのは、命のところで「感応道交」し合っているから、動物でも花でも全部そう、花が咲いたらうれしいでしょう。何か元気が出るでしょう、うわーって。あれはいのちといのちがしゃべっているや。と僕は思う。で、そう言う世界の方が根源的だと思う。だから猫は分かっている。僕がそう言う「馬鹿じゃないか」と思うでしょう。僕も昔そう思っていました。ペットを抱いているおばちゃんを見て、「こいつはアホや」と思ったけど、あれ、猫は分かっている。僕は仏さんやと思っている。いやいやしょうもないことを言ってすみません。今日の講義はここまでにいたしましょう。質問がありましたら、まだ30分ありますから。

質疑応答

質問者1・先生どうもありがとうございました。あの、なんというか、ものすごい熱弁で胸が熱くなりましたけれども、

先生・いらんことを言わなくてもいいから、早く質問をしなさい（笑）。

質問者1・いらんことのついでに先生が葬儀の後、お車でお出になった後、先生のお寺に実は伺ったのです。そうしたらその猫が出てまいりまして、「どんな奴が来たか、いっぺん見ておこう」と猫に見られました。（トンネル爆発事故犠牲者の）慰霊塔に向かって阿弥陀様の仏壇があって、ここで先生が何十年も、先生のご先代から頑張り続けられたのだということに非常に感銘をいたしました。

先生・いやいやお恥ずかしいです。

質問者1・それは感想ですが、こんな質問をすると、一体今日は何を聞いていたのかというふうにお思いになることかと思いますが、道綽が親鸞の立脚地である。別な言葉で言えば、真宗の立脚地である。と言われたのは、これから先は御怒りになるかもしれませんが、何をもってそうおっしゃるのですか。

先生・はい、一つは、あの「正信偈」の中に、道綽の「三不三信の誨（おしえ） 慇懃にして」と、こういう、まあ「正信偈」の中で最大の誉め言葉が、道綽の三不三信になっていますね。そうですよ

ね。あの「慇懃にして」と言うのは、道綽の三不三信と『教行信証』の証の巻の結帙にある曇鸞の「他利利他深義慇懃にして」（「ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまえり」東聖典298）と出てきます。つまり丁寧に、しかも私のような凡夫に分かるように、懇切丁寧に教えてくれている。こういうふうに「正信偈」に褒めておられる。ところが今日申し上げましたように、三不三信の誨は、『教行信証』にも和文にも他の著作にも、どこにも出てこない。だから、それが一体なぜなのかということをお私はずうっと勉強し始めてから不思議でした。

そして、『教行信証』を読んでいると、今日申しましたように、一番の親鸞の己証、親鸞の自分が立った立脚地を表明しながら、他力の信心に涅槃の覚りが開かれるのだ。これが浄土教の最大の不思議さ、「誓願不思議」ですね。それを明らかにしているのが三一問答です。そうですね。そして、この世で、私たちのことですよ、私たちはこの世で自力しか生きてませんでしょう。だれもね。その自力しか生きていない者になぜ他力の世界を教えてくれるのか。これがこの世での不思議。どうして他力に導けるのか。死ぬまで自力の根性が抜けなくてね、さっき言ったように「何でこんな病気になったのか」と言って、私は最後まで泣く。これが人間です。

その人間を他力の世界に導いてくれたのは、これは何と言ってもお釈迦様だと。この本願の三信は阿弥陀さんの仕事。だけど、この世で私たちが自力から他力にどうして目覚めるのかと言えば、それはお釈迦様の導きになる。そうですね。そしてそれは、『観経』によって自力無効を知りなさい。そして『大経』の本願に生きる者になりなさい。さらに、その本願に生きる者になっても最後まで自力が抜けないから、その自力のままに「果遂せずばおかん」（「果遂せずんば、正覚を取らじ」）と誓っているのが二十願の問題、『阿弥陀経』の問題だと。だから、『観経』、『大経』、『阿弥陀経』、これによって、私たちが自力から他力の世界に導いてくださったお釈迦様の仕事と、それから他力の一心に涅槃が開かれるという、至心・信楽・欲生と誓って下さった阿弥陀さんのはたらきと、この娑婆ではお釈迦様、この信心の内容としては阿弥陀さん、その二つのはたらきによって、私たちはこの真宗という仏教に立つのだと言うことを表明しているのが親鸞の『教行信証』になります。

そうすると、どちらも何度も今日申し上げましたように、道綽の三不三信、この教えの中に納まっていく。逆に言うと、道綽の三不三信から展開していく。そういう形になっていますから、そういう意味で、道綽の三不三信が真宗の立脚地であり、親鸞が立った立脚地だと。だから親鸞は、自分の立脚地をくどくど説明しない。私が立っているところは『教行信証』をよく読めば分かるはずだと。こう言うので道綽の「三不三信の誨、慇懃にして」という言葉があるにもかかわらず、道綽の三不三信を引かなかったのではないか。そういう意味で、ここが一番の要になりますよと、さらにさっき言ったように、ここから七祖が決まってきます。そうすると、ここにすべてあるでしょうと。こういう意味で申し上げた、ということです。

質問者 1・・・分かったような、分からないような。

先生・・・またそのうちに、分からない人には何度も言うと、そのうちにそうなりますから。

質問者 1・・・その問題はもうそれで一応うかがっておいて、後で私の努力をいたします。それでもう一つ法然聖人の、直接の師匠である法然聖人の教えというものと親鸞聖人の立脚地との関係はどういうことになるのでしょうか。

先生・・・いやいや、もちろんね、この善導大師にしても、「念仏一つだ」と善導大師はおっしゃいますね。けれどもなぜ念仏一つかと言うと、念仏は本願の念仏だからですね。ですから二種深信でも、「自身は現にこれ」と言って、法の深信になると「かの阿弥陀仏の四十八願は」、「かの阿弥陀仏の四十八願」というのは、『大経』に説かれている阿弥陀仏の四十八願は、「衆生を摂受して、疑いなく慮（おもんばか）りなくかの願力に乗じて」（信巻・東聖典215）、どんな人も『大経』に説く本願の中にある。どんな人も、できる人もできない人も本願の中にある。皆さんは気が付かないと思いますが、本願に促されて今日来たのだと思いますよ。皆さん気が付かないと思いますが、本願に促されてこの人生を迷って来たのよ。女に狂い、金に狂い、地位に狂い、名誉に狂ったそのことは、実は本願の裏返しです。本願の中にある。

これが善導大師の自信です。だから善導大師は名号一つ、念仏一つと言うけども、本願に、本願の念仏だから、善導大師はそう言うのですね。法然もまた一緒です。法然が回心をした文章、今、法然の回心と言ったから、法然が回心をした文章は217ページの終わりから3行目（西220～、島12-61）、「一心に弥陀の名号を専念して」、だからこれ「念仏一つだ」と、こう言っているね。そして「行住座臥、時節の久近を問わず」、歩いていようと座っていようと立っていようと寝ていようと、時節の長い短いを問わず、念仏しなさい。一心に弥陀の名号を称えなさい。「念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく」、念仏を称えれば必ず本願に救われていくのだと、だから「正定の業」と言うのだと。そして、そのあとに「かの仏願に順ずるがゆえに」。ここね。これが法然の説く念仏です。だから本願に裏打ちされた念仏、本願の念仏だから、念仏一つと言ってるわけですね。ですから立脚地はどうかと問われると、それは『大経』の本願に決まっている。親鸞であれ法然であれ、『大経』の本願に救われたのだから、そこが立脚地ですね。そう考えていいと思います。岡田先生それでいいですか。

質問者1・・・はい、ありがとうございました。

質問者2・・・どうもありがとうございました。すごい早いなあと思ったのですが、私、自分で褒めています。先生の御本を読んで全部記録をして、この聖典に書き込んでいたのが全部、その通り、先生の本のおかげで、この話もよく聞けるので、本を読ませてもらってありがたかったなと思っています。それから信の巻というのは、親鸞聖人の己証と言われるのですが、一人一人己証を持っていると言われたでしょう。だから、どういう表現をしたらいいかなと思ったけれど、今日、三不三信という道綽の話と、自力と他力ということがものすごくよく分かった。

先生・・・これは、折角だから言います。これは善導大師のところまでくると、こっち（不淳・・・）が「機の深信」、こっち（淳心・・・）が「法に深信」になります。分かりますね。こっち（機の深信）が「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」、こっち（法の深信）が「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して」（信巻・東聖典215）というふうに、善導大師のところまでくると、これが「二種深信」として展開していきます。だから、ここが元になっているというふうに考えていいと思います。おっしゃるよう本にはしつこく書いていますので、分かっても分からなくてもよく読むと、まあ皆さん年ですから（笑）、けど、年の僕が書いたのだから分かると思います。本をお読みになると「あ

あなるほど、そういうことか」と、もう少し分かってくださるかもしれません。

質問者 3・あの、私も先生の本を一生懸命読みました。だから、今日は分かりやすかったのですが、曇鸞が三不三信を言われて、自力だけど、でもその中にやはり照らされた姿なのですかね。

先生・そうですね。

質問者 3・だからそういう三不三信というのが出てきて、

先生・そうですね。今度実際に、曇鸞の三不三信の文章を読みますけれども、「三不三信が私自身である」とあってね、「これと相違せるを「我一心」と言う」で終わります。そうですね。自分の身は凡夫で自力だと。「これと相違せるを「我一心」と言う」と、こう言うわけです。解説として読むと、自分が駄目な自力で、我一心が他力なのだと、こういうふうに解説的に読むと分からなくなる。実は、曇鸞は他力の「我一心」というところに立って、私が不淳・不一・不相続だと、こういうことを言っているのです。ということですから、おっしゃるように他力の信心に立って、自分自身が不淳・不一・不相続だと、「他力の信心」と言うのはこっち（法）側です。こっち側に立っているけれども、立っていることを言わないで、私と相違しているのを「我一心」と言うと、ここまで言っています、曇鸞は。相違している「我一心」とは何かというふうに考えると、「至心・信樂・欲生」だというふうに展開したのが道綽になります。

質問者 3・ありがとうございました。もう一つですが、「我一心」のところで、『論註』の最も大きな功績は、天親が「世尊我一心」と表明した信心が凡夫に発起する他力の信心であると明らかにしたこと、という文章があったのですね、先生の本の中に。この短い中に「凡夫に発起する」という、このなかでその「世尊我一心」の「我」のところで、凡夫にということに気が付いたのでしょうか。

先生・あのね、そこはなかなか難しいところなのですが、世親はあくまでも菩薩だから、だから「世尊我一心」とこう言って、その「我」が凡夫であるというふうに言っているかどうか、これはなかなか難しいところです。ただ、親鸞の眼を通して読むと、あるいは曇鸞の眼を通して読むと、「我」というのは、本当は仏教では「無我」のはずなのに、なぜ「世尊我一心」と、「我」と言うのかと、この「我」はどういう意味かというふうに曇鸞が『論註』の中で問うて、この「我」は自我の「私が」という「我」ではないと。そうじゃなくて、「一心」に賜った新しい主体なのだと。そしてその「我」は流布語（るふご）の「我」だと。全部に共通する「我」だと。こういうふうに曇鸞が註釈していきます。ですから、今、おっしゃったように、曇鸞の眼を通して読むと、この「我」というのは、「身」と考えてもいいし、「凡夫の身」であると、「一心によって新しく賜った我」。私たちは普通は「私」と言うと、「偉そうな自分」しかありません。時々躓いて失敗して、「あれ、しまった」と思うけど、それが決定される。仏教に触れて信心が起こった時に凡夫であることが決定するから、親鸞は死ぬまで「愚禿」と名乗って揺るがなかった。それは信心によって明らかにした主体、「我」。それは「私の我」と言うよりも、「みんなと共通の身」だと考えてもいいという意味で、流布語（るふご）だと言っています。

そういう意味で親鸞、曇鸞の了解を通してみると、「世尊我一心」の「我」は凡夫の自覚であると、こう見て間違いではありません。それは但し、親鸞、曇鸞を通して見た時に、そう見えるというふうに思います。

質問者 3・ありがとうございました。

先生・「我」と言うのはね、もう一つ言えば「設我得仏」と言うでしょう。「我、仏を得んに」、「設我得仏」、全部「我」です。だから、世親の「我」は、ひょっとしたら「法蔵菩薩の我」を言っているのかもしれませんが。「設我得仏」、菩薩ですから世親はね。しかし曾我さんが言うように、「凡夫の自覚を頂いて、この心は法蔵菩薩の魂を生きていくのだ」と、こういうように必ず法蔵菩薩の自覚は、「この身の我」という、「愚禿」という「凡夫」の自覚と離れないから、世親はひょっとしたら「法蔵菩薩の我」を言ったのかもしれない。

それに対して曇鸞以降は、ひょっとしたら「宿業の我」ということを言ったのかもしれない。そんなふうに考えることができますから、世親の「我」はあながち「凡夫の自覚」だというふうに言い切ってしまうことはちょっと難しい。けど、いずれにしても「設我得仏」という「法蔵菩薩の魂」を頂いたのだと、こう言ってるのかもしれない。それは曇鸞、親鸞からすると「凡夫なのです」ということになるから、先程申し上げたように言ったということですよ。

質問者 3・どうもありがとうございました。

田畑先生・先生質問いいですか。先生はよく講義の中で「逆立ちしても分からん」と言う、そういう意味の無分別智の世界を表現されますけども、どうしても私たち分別でこうすると、そういう形で知らされたことを何か私有化して、つい使ってしまったりますよね。そこらへんの交通整理みたいなのはどう考えたよいでしょうか。

先生・それはなかなか難しく、つまり信心を、今出た言葉、あるいは解説、説明する、その時に生き生きとした信心が今度は観念に変わっていつてしまう。仏教というのは、いつもそういう恐れを持っていますね。それは必然的にそういう恐れを持っていますから、

田畑先生・言葉を使う以上、必ず分別の概念の中に表現してしまう。

先生・そうです。だから最初お釈迦様もそれで悩んだ。法を覚った、けど、これを言葉にして説くと、人間は言葉で理解するから、覚った悟りとは違ってしまふから、だから、これは説いてはいけないというので説かなかった。三、七日、金剛宝座の上に座って瞑想をしていた。ところが梵天が降りてきて、「分かる人がおるかもしれないから説いてくれ」と、「言葉にしてくれ」と言って、梵天の勧請を受けて、初めてお釈迦様はそこから立ち上がって、仏陀から如来になった。「如から来た人」、つまり、「説法をする如来」になった。その時には必ず今言ったように、説いたことが人間の観念に変わってしまうから、だからお釈迦様も最初説かなかったのは、そう言う意味です。ところが梵天の勧請は、「分かる人がおるかもしれない」、それをもうちょっと言うと、「理性に行き詰

まって、頭の世界では生きていけなくなった人がひょっとしたら分かるかもしれない。だから、「言葉にして説いてくれ」と、そういうふうに理解してもいいと思います。

だから、頭のいい人、観念的に理解する人、そういう人は仏教がかえって分からなくなるかもしれません。そういう恐れがある。だから、説く方もそういう恐れがあるために、分かりやすく言うと、結局理解はできるけど救いにならないという。だから曾我さんは、そういう解説をしなかった。あの人は「本願が分かりませんか。本願です。」と訳の分らんことを言っていた(笑)。「本願です」「本願です」と、こんなことをするわけです。ここにはたらいしているのがお前分からんかと言ってるんだけど、それが分からんから、あの人は頭がおかしいと思うんやけど、解説しないわけですね。それで、そういうやり方もあると思います。しかし僕らは分かるように、何とかして、ここで講義をするのに、分かるように申し上げているけども、やっぱり、それを分かるように話すと必ず先生がおっしゃるようなことが起こるので、これは、

田畑先生・・・これはもう、いつもお話を聞くとか、本を読むとか、お経の言葉に照らされ続けるしかないわけですね。

先生・・・そうです。そして「理解し、分かる」と、外に求めていく分かり方が、ある時「あっ」とこっちに向く、自分に向くことがある。その時に本当に分かる。方向が変わる。それを回心というけど、そういう人がやっぱりおるから。だから田畑先生のようなよく分かっている人は、やっぱりちゃんと教えを説くことが大事だと思います。ただし、いつもそういう恐れは必ずあるということは、もうこれは承知しておかなければ、しょうがないんじゃないでしょうか。それを超えなさいというと、もうお釈迦様になるしかないので(笑)、私は答えようがありません。

田畑先生・・・ありがとうございました。

先生・・・梵天の勧請というのは、そういう意味では、なかなか意味深いことで、天の神様がお釈迦様に説けと促すわけですよ。

質問者 4・・・一つよろしいでしょうか。なんか私は分かったという人ばかりですけど、私は今日は全く分かりませんで、ついていけなかったんですけど、先生一つだけ、まあ「一心」のこともまた、帰りの車の中できっちり教えていただこうと思ったんですけど、先生、「三不信」、不淳・不一・不相続と、その道綽が「三信」ですか、その反対の淳心・一心・相続心と言われた、例えば、先生、『観経』の三心(さんじん)と本願の『大経』の三心(さんしん)が対応していると言うなら、両方とも肯定した言葉ですから、至誠心・深心・回向発願心と至心・信楽・欲生が対応すると言われれば、なんとなく「そうか」と思われるのですが、かたや否定している言葉をそのまま肯定形に変えているということは、どういう心で道綽さんは、その反対の言葉を言ってみたのでしょうか。

先生・・・一心という信心は、これは淳心・一心・相続心と言わざるを得ない。他力ですから。そこに立ってみると自分の身は不淳・不一・不相続だとしか言いようがない。これは、君は理解しようとするから分からないので、信心というものはそういうものです。信心の内容というものは、他力の

信心に立って初めて、自分は不淳で不一で不相続だと、「申し訳ない」と頭が下がるのであって、それは必然的にそうなるのであって、「なぜか」と言われても、信心というものはそういうものです。それは理解しても分からない。理解すると「反対のことではないか」と、こうなる。反対のことだから、不淳・不一・不相続ということがはっきりする。こっちがね。

質問者 4・今先生がお答えを言われたのですが、一心は、「我一心」は淳心・一心・相続心だと道綽さんはそう言われるわけですね。

先生・そうです。

質問者 4・それが分かってみると自分は不淳・不一・不相続な自分であるという、そういう意味ですか。

先生・そうです。その通り。

質問者 4・はい、分かりました。

先生・如来の真実に照らしてみれば、不淳・不一・不相続という言葉、今度は言葉を変えれば、如来の真実、如来の智慧に照らされてみれば、自分はどこまでいっても不淳・不一・不相続の身ですと、頭を下げるしかありません。こういうことですから、それが法然との出遇いで起こったことですね。そういうことだと思います。それでいいですか。

質問者 4・全部は分かりませんが、そのうちの一つだけ。先生右から四行目の字は何と書いているのでしょうか。その字（「不心実」）間違ってますか。

先生・法然がこう書いているので（笑）、あの、今の字でいうと間違っているのではないかと、字がいっぱいあります。けどそれは「不心実」というこの字はおかしいじゃないかと言うけれども、法然がこう書いている。しかし多分「真実」という意味だろうと。だから「真実がない」と、淳心でないと、決定がないと、こういう意味だと思います。

質問者 1・それではよろしいでしょうか。先ほど溝口さん（質問者 2）が「先生のお話がよく分かった」と。御本を読んでいるということでした。どういう御本を読んでもらえるのか教えていただけたら私も参考になると思うのですが。

質問者 2・もう皆さん読んでいると思いますが、『親鸞の主著「教行信証」の世界』と、もう一つは、今年の『「大無量寿経」の仏者 親鸞 一宗祖の三部経観一』（いずれも東本願寺出版）、その 2 冊です。

質問者 1・分かりました。一生懸命読みます。

質問者2..先生の本はよかった。『大経』の本もよかった。ありがたい本を読ませてもらって感心しております。自分に与えられている幸せを感じます。

先生..今の2冊では、多分触れていますから、一回ちょっと読んでみてください。できるだけ分かりやすいように「です、ます調」で書いていますので。

田畑先生..よろしいですかね。それでは先生どうもありがとうございました。これで今回は終わりたいと思います。

先生..えっと、本当に、皆さんの温かいご厚誼、家内に対して大変ありがとうございました。
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 (恩徳讃、終了)

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん
添削：田畑正久先生、住職